2025/26 年 競技規則の変更
競技規則変更の概要

第 3 条 – 競技者
- 競技会は「キャプテンオンリー」のガイドラインを実施することができる。

第 5 条 – 主審
- ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールすることに対する8秒制限の残り5秒をカウントダウンするために主審は合図する。

第 8 条 – プレーの開始および再開
- プレーが停止されたとき、ボールが
  - ペナルティーエリア内にあった場合 – ボールは、ペナルティーエリア内で守備側チームのゴールキーパーにドロップされる。
  - ペナルティーエリア外にあった場合 – ボールを保持していたチーム、または保持したであろうチームが主審にとって明らかであれば、ボールはそのチームの競技者の1人にドロップされる。もしそうでなければ、最後にボールに触れたチームの競技者の1人にボールはドロップされる。ボールはプレーが停止されたときにボールがあった位置にドロップされる。

第 9 条 – ボールのインプレーおよびアウトオブプレー
- チーム役員、交代要員、交代して退いた競技者、退場になった競技者、または一時的に競技のフィールドから離れていた競技者が、競技のフィールドから出ようとするボールに触れたが不正に妨害しようとする意図がなかったとき、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則は与えられない。

第 11 条 – オフサイド
- 競技者がオフサイドポジションにいるかを決めるのに、ゴールキーパーがボールを投げたときは最後のコンタクトポイントを用いるべきである。

第 12 条 – ファウルと不正行為
- 手や腕で8秒を超えてボールをコントロールしたゴールキーパーは罰せられ、相手チームにコーナーキックが与えられる。

第 16 条 – ゴールキック
- ゴールキックになる状況を詳細に述べている他の条文を参照すること。

第 17 条 – コーナーキック

- コーナーキックになる状況を詳細に述べている他の条文を参照すること。
- コーナーキックは、反則が起きたときのゴールキーパーの位置に近いコーナーエリアから行われる。

その他:

– VAR 実施手順
- 競技会は VAR の「レビュー」または VAR の長い「チェック」の後に、主審によるアナウンスを行うことができる。

競技規則変更の詳細

以下、2025/26年競技規則の変更点となる。各変更点について、これまでの文章に加え、改正された、または追加された文章が記されている。また、必要に応じて、変更理由も付記している。

符号
競技規則の主な改正に黄色の下線を引き、余白をハイライトした。
編集の変更に文字と同色の下線を引いた。
YC＝イエローカード（警告）　　RC＝レッドカード（退場）

第 3 条 – 競技者
10. チームキャプテン
追加された文章

各チームには、フィールド上に（キャプテンとして）識別できるアームバンドを着用したキャプテンがいなければならない。チームのキャプテンは、なんら特別な地位や特権を与えられているものではないが、そのチームの行動についてある程度の責任を有している。

競技会は、「注記および修正」に記載されている「キャプテンオンリー」のガイドラインを実施することができる。

解　説

競技会には、フィールドにいる競技者の振る舞いを改善し、そして競技者と審判員の協力関係を高め、信頼関係をより良くするために「キャプテンオンリー」のガイドラインを使用することが勧められている。

第 5 条 – 主審
6. 主審のシグナル
（...）

ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールすることに対する8秒制限の残り5秒をカウントダウンする。

第 8 条 – プレーの開始および再開
2. ドロップボール
修正された文章

進め方

- ~~次の状況でプレーが停止された場合、ボールは、ペナルティーエリア内で守備側チームのゴールキーパーにドロップされる。~~
  - ~~ボールがペナルティーエリア内にあった。または、~~
  - ~~ボールが最後に触れられたのがペナルティーエリア内であった。~~

- ~~その他のすべてのケースにおいて、主審は、ボールが最後に競技者、外的要因または審判員（第 9 条 1 項に示される）に触れた位置で、最後にボールに触れたチームの競技者の 1 人にボールをドロップする。~~
- プレーが停止されたとき、
  - ボールがペナルティーエリア内にあった場合、主審は、ペナルティーエリア内で守備側チームのゴールキーパーにボールをドロップする。
  - ボールがペナルティーエリア外にあった場合、ボールを保持していたチーム、または保持したであろうチームを主審が判断できれば、そのチームの競技者の1人にボールはドロップされる。もしそうでなければ、最後にボールに触れたチームの競技者の1人にボールはドロップされる。ボールはプレーが停止されたときにボールがあった位置にドロップされる。
    - (...)

解　説

ボールが、最後にボールに触れたチームの相手競技者に、明らかに渡る場合がある。そのようなケースでは、そのことが主審にとって明白な場合に限り、ボールを保持したであろうチームにボールをドロップすることがよりフェアである。ペナルティーエリア外では、これからは、プレーが停止されたときにボールがあった位置にドロップされることになる。

第9条 – ボールインプレーおよびアウトオブプレー

2. ボールインプレー

追加された文章

ボールは(…)フィールド内にある場合も常にインプレーである。チーム役員、交代要員、交代して退いた競技者、退場になった競技者、または一時的に（負傷、用具を正すためなどで）競技のフィールドから離れている競技者が、不正に妨害しようとする意図なく、明らかにフィールドから出ようとしているインプレー中のボールに触れた場合、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則は与えられない。

解　説

監督、交代要員、または一時的に競技のフィールドから離れている競技者（その他の人も含めて）が、素早くプレーが再開されるように、アウトオブプレーになるボールに触れてしまうことがある。このような場合、繰り返しテクニカルエリアから出ることで警告される場合を除き、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則は与えられない。

第 11 条 – オフサイド

2. オフサイドの反則

追加された文章

＊ ボールを「プレーした」か「触れた」最初のコンタクトポイントを用いるべきである；しかしながら、ゴールキーパーがボールを投げたときは、最後のコンタクトポイントを用いるべきである。

解　説

競技者がオフサイドポジションにいるかどうかを決めるとき、ボールとの最初のコンタクトポイント（競技者がボールに触れた瞬間）が用いられる。しかし、ゴールキーパーがボールを投げたときは、最後のコンタクトポイント（ボールが手や腕から離れる瞬間）を用いるべきである。これにより、より明確で一貫した基準が示されたことになる。

第 12 条 – ファウルと不正行為

2. 間接フリーキック

改正された文章

ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、次の反則のいずれかを行った場合、間接フリーキックが与えられる。

- ~~ボールを放すまでに、手や腕で6秒を超えてコントロールする。~~
- ボールを手放した後、他の競技者がボールに触れる前に、手や腕でボールに触れる。
- 次のような状況で、ボールを手や腕で触れる。ただし、ゴールキーパーがボールをプ レーに戻すため、
- 明らかにボールをけった、またはけろうとした場合を除く。
  - ボールが味方競技者によって意図的にゴールキーパーにキックされる。
  - 味方競技者によってスローインされたボールを直接受ける。

~~ゴールキーパーがボールを手でコントロールしていると判断されるのは、次のときである。~~

- ~~ボールがゴールキーパーの両手で持たれているとき、またはボールがゴールキーパー の手と他のもの（例えば、グラウンド、自分の体）との間にあるとき、ボールに手や腕 のいずれかの部分で触れているとき。ただし、ボールがゴールキーパーからはね返った、またはゴールキーパーがセーブした場合を除く。~~
- ~~ゴールキーパーが広げた手のひらでボールを持っているとき。~~
- ~~ボールをグラウンドにバウンドさせる、または空中に投げ上げたとき。~~

~~ゴールキーパーが手でボールをコントロールしているとき、相手競技者は、ゴールキーパーにチャレンジすることができない。~~

3. コーナーキック

ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、ボールを放すまでに手や腕で8秒を超えてコントロールした場合、コーナーキックが与えられる。ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしていると判断されるのは、次のときである。

- ボールが両手や両腕で持たれているとき、または手や腕と他のもの（例えば、グランド、自分の体）との間にあるとき。
- ゴールキーパーが広げた手のひらでボールを持っているとき。
- ボールをグラウンドにバウンドさせる、または空中に投げ上げたとき。

主審は、いつゴールキーパーがボールをコントロールして8秒が始まるかを判断し、そして手を上げて目で見て分かるように最後の5秒をカウントダウンする。
ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしているとき、相手競技者は、ゴールキーパーにチャレンジすることはできない。

解 説

- ゴールキーパーが手や腕で8秒を超えてボールをコントロールした場合、主審は（間接フリーキックではなく）反則があったときにゴールキーパーが位置していた場所に近いサイドからのコーナーキックを与える。ゴールキーパーが繰り返し反則を行わない限り、懲戒処置はとらない。
- ゴールキーパーに分かるよう、主審は上げた手を使って最後の5秒を合図する。

以下の各項の番号を次のとおり変更する

4. 懲戒処置
5. ファウルや不正行為の後のプレーの再開

第 16条 – ゴールキック

追加された文章

ゴールキックは、グラウンド上または空中にかかわらず、最後に攻撃側競技者が触れたボールの全体がゴールラインを越え、得点とならなかったときに与えられる（第8条、第10条、第13条、そして第15条についても参照する）。

第 17条 – コーナーキック
追加された文章

コーナーキックは、グラウンド上または空中にかかわらず、最後に守備側競技者が触れたボールの全体がゴールラインを越え、得点とならなかったときに与えられる（第8条、第12条、第13条、第15条、そして第16条についても参照する）。

1. 進め方
追加された文章

ボールは、ゴールラインを越えた地点、または反則が起きたときのゴールキーパーの位置にもっとも近い方のコーナーエリアの中に置かれなければならない。

ビデオアシスタントレフェリー（VAR）実施手順
4. 進め方
追加された文章

最終の判定

- レビュープロセスが終了したら、主審は、「TVシグナル」を示し、最終の判定を伝えなければならない。また、競技会はFIFAのガイドライン、そしてVARハンドブックに示されているように、VARの「レビュー」またはVARの長い「チェック」の後に、公に決定を説明し、アナウンスするシステムを導入することもできる。
- 主審は、（必要に応じて）懲戒処置をとり、変更し、または撤回し、競技規則に基づき プレーを再開する。

解　説
試行の成功を受けて、競技会はVARの「レビュー」またはVARの長い「チェック」の後に、主審による決定のアナウンスそして説明を行うことができるようになった。

用語集
ドロップボール
改正された文章

~~プレーを再開するための方法 – 主審は、最後にボールに触れたチームの 1 人の競技者 にボールをドロップする（ボールがペナルティーエリア内の場合、ゴールキーパーにド ロップする）。ボールは、グラウンドに触れたときにインプレーとなる。~~

反則が行われたのではなく、例えば、負傷やボールの欠陥などによりプレーが主審によって停止されたときの再開方法（第8条参照）

審判員のための実践的ガイドライン
ポジショニング（位置取り）、動き方とチームワーク
2.ポジショニングとチームワーク

追加された文章

ペナルティーキック

副審は、ゴールラインとペナルティーエリアラインの交点のところに位置しなければならない。

ただし、ゴールキーパーの侵入や、得点か得点でないかを確認するために、テクノロジー（例えば、ゴールラインテクノロジーや VAR システム）を使ってゴールラインを監視できる場合、副審は（オフサイドラインとなる）ペナルティーマークの延長にあるタッチライン上に位置することが推奨される。それは、キックされたボールが跳ね返った場合、副審がゴールライン上にいることで、オフサイドの判断をするためのポジションに戻ることができないリスクが生じるからである。追加副審がいる場合、追加副審はゴールラインとゴールエリアの交点のところに位置しなければならない。副審は、ペナルティーマークの延長上~~（オフサイドライン）~~に位置する。